



敦煌の千佛洞について

敦煌千佛洞南端附近の景観（1957年）

大周李君修功德記と題した碑が、缺損しながら今も存して居る筈で、これに依るとその創始の事がほゞ判明する。この碑文を廣く世に傳へたのは自分の知る所では、道光三年に出刊された西域水道記の著者徐松であつて、その書の第三卷には、當時讀み得られた碑文の全部を載せてある。佛蘭西のシヤヴンヌ教授は、水道記のこの文に據つて、佛洞創成の始末に言及したのであつたが (*Dix inscriptions chinoises de l'Asie Centrale* p. 11)、スタイン博士の言ふ所に依ると、敦煌の千佛洞中、氏が Ch. III と名づけて居る佛洞に存する石碑がそれだと思はれるとの事である (*Serindia*. Ch. XXI, p. 798)。氏の記述が常に精細周到であるに似ず、この石碑についてはかく推測を試みた丈で、その寫眞も筆寫も載せてないから、今はたゞ氏一個の推測といふより外に致方ないが、別にペリオ教授が親しくこの佛洞を訪ふた有様を書いたものを見ると、こ